

本誌+マル研共催の宿泊研究会 in OAB 「ローカル局の今後」を トコトン考える “場づくり”への一歩



ローカル局からの参加が41人、総勢90人で開催

本誌・月刊ニューメディアとマルスクリーン型放送研究会（通称：マル研）共催企画「ネット配信とローカル局の今後を考える」宿泊研究会（協力：大分朝日放送）が7月5日～6日、大分朝日放送別館で開催された。ネット配信事業者の隆盛や同時送信の議論などで放送サービスが新たな局面を迎える中、「結論を急ぐよりも、トコトン話せる場を生み出す関係づくり」（主催者）を目指した今回の宿泊研究会から注目の論点を紹介する。（レポート：高瀬徹朗・本誌特別記者、写真：河崎秀一）

「圧倒的なローカル局」 OABの施設を見学

宿泊研究会の舞台となった大分朝日放送（OAB）は、2015年6月という早いタイミングで地上波民放初となる「4K一貫制作システム」の整備をはじめ、ローカル民放の立場から極めて先進的な取り組みをすることで知られている。

そうした姿勢をけん引しているのが、現・代表取締役社長の上野輝幸氏だ。40

年余りを過ごした九州朝日放送（福岡）を経て、2010年にOAB社長に就任。以来、数々の先進的な方針によって「ローカル放送局の奇跡」とさえいわれるOABの躍進を支えた。

OAB本館および別館を実際に見学してみると、上野氏の取り組みがいかに先進的であるか、視覚的に理解することができる。

「NASAを意識した」というコロシアムのような報道フロア。壁面のガラス窓から海が見える風景をバックにニュースが読み上げられる4階のスカイスタジオは、津波被害を想定した災害対応スタジオ。また、毎朝の番組を放送する

屋外のガーデンスタジオファイブ。自前で用意したB0サイズ大判プリンターで制作した縦長の垂れ幕や、LEDパネルポスターが配置された本館ロビー。さらに、有名となっているカプセル型の編集室。随所に配置されたLEDライト、局内のどこでも感じるアロマの香りが、幻想的で未来的なOABの印象を引き立てるという圧巻ぶり。

参加したローカル局のメンバーから「考えられない。あまりに凄い」と感嘆の声が異口同音に漏れたのも無理はない。それだけのインパクトが、OAB局舎にはあった。

●大胆な局舎デザインを見学



自社プリンターでオリジナル制作した垂れ幕がアピールする玄関ホール



熊本・大分地震、今回の九州北部豪雨の緊急報道で活躍したNASA的配置の報道センター



カプセルスタイルの編集センターはインパクト大のデザイン。これは実際に見るのが一番！